

氏名	傅澎 甲子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博乙第2818号
学位授与年月日	平成29年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	A Comparative Research on History and Trend of Chinese and Japanese Galleries from the Perspective of Cultural Studies (文化論の視座からみた日中のギャラリーに関する研究)

主査	筑波大学 教授	文学博士	佐藤 貢悦
副査	筑波大学 教授		仲田 誠
副査	筑波大学 准教授	博士（文学）	巖 錫仁
副査	筑波大学 准教授	博士（国際政治経済学）	明石 純一
副査	中国美術学院中日文化研究所教授	美学博士	王 伝峰

## 論文の要旨

本論文は、基本的には、近年欧米さらには中国にて注目されつつある「芸術管理(Art Management)」の視点から、その重要な構成要素である画廊(gallery)に焦点を当てたものである。芸術管理という研究領域が、政治、経済、哲学（美学）、芸術、歴史などの複数領域に跨がる学際性を如実に有することから、その研究成果は必然的に広義の意味での比較文化論的な色彩が濃厚となる。

筆者の定義によれば、ここでいう画廊とは、一義的には美術品を収蔵し陳列し売買するなどの場所ということである。中国、日本のいずれにおいても、芸術管理あるいは芸術取引そのものが複雑な様相を呈しつつある今日、美術館(art gallery)や芸術館(art museum)と画廊とはときに密接な関わりをもってくるのが実状であり、あるいはさかのぼってみても歴史的な遺跡群など、今日いうところの画廊と広い意味での「芸術管理」という点できわめて類似する機能をもっていたことから、このような施設や場所もまたいわゆる画廊と同様に本研究の対象となることは自然である。本論文において、こうした視点からの「芸術管理」に関する分析は重要な論点となる、と筆者は主張する。

本論文は、序章にあたる全体の概要を開陳したイントロダクション、第一章から第十章にわたる本文からなる章立てによって構成されている。

第一章は、中国における画廊の前史であり、筆者によれば、それが以下の四段階に分けられる。第一は、原始社会から魏晋南北朝にいたる長い芸術発生期である。第二は、随唐における芸術管理の発生期である。第三は、宋から清にいたる芸術管理の発展期である。そして第四は、民国以降の芸術管理が明確に自覚され確立された時期である。

第二章は、日本における画廊の前史である。筆者によれば、この時期も四段階に分けられる。第一は縄文から古墳時代であり、芸術の発生期である。第二は飛鳥から平安にいたる芸術管理の発生時代であり、中国文化の影響を受けながらさらにそれを脱却していくことで日本独自の芸術作品を生み出していった時期である。第三は、鎌倉から江戸にいたる時期であり、ここにおいて今日的に言えば職業画家と芸術作品を扱う商人が出現した。第四は、明治から昭和にいたる、日本人が芸術管理に目覚めた時代であり、その原因としては、西洋の芸術ならびに芸術管理が国内に浸透したことがあげられるという。

第三章において筆者は、日中のいわゆる画廊前史期におけるそれぞれの芸術管理の方法、ならびにその奥にある文化的背景について考察する。筆者によれば、その文化的な沿革としては、仏教、儒教に関連の種々の作風において類似性、共通性が認められる反面、たとえば中国の水墨画と日本の南画にみられるような明らかな画風の相違が存在する理由は、端的にいうなればそれこそが絵心の違いというべきものである。そのことは、芸術作品が作者個人の意識を反映するものだというにとどまらず、社会や歴史的潮流といったものが作品制作に預かるということにもなり、こうした点も芸術管理の重要な論点となるということ、筆者はやや婉曲な表現によって主張する。

第四章において、筆者は、現代中国とりわけ80年度中期以降の改革・開放期における北京、上海、厦門の八カ所の画廊の発展の現状を伶俐な視点で分析する。筆者は、そこに中国の現状が抱える贗作をはじめとする構造的諸問題を発見したという。そのことは、この点にまさに現代中国の芸術管理が正視すべき大きな問題が存するという主張でもある。

第五章は、日本の画廊の現状に関する分析である。筆者によれば、戦後間もなく開始された画廊の復興の歴史は、平成にいたる今日まで連綿として秩序ある発展を遂げており、とりわけ展覧会を中心とする活動にみられるように、地域性やテーマを問わず全体に成熟した発展段階を迎えているという。

第六章において筆者は、日中の画廊の現状について芸術管理の視点からさらに突っ込んだ分析を行っている。類似性からいえば、経済発展にともなって急速な成長を遂げた中国の画廊は、経営方式、展示方式など西欧諸国に近づいてきており、そうした意味では常に先行してきた日本のそれに接近しつつあるという。一方で、相違点からいえば、著作権、知的所有権に代表される法律的な問題など、日本から学ぶべき点は多いと筆者は述べる。

第七章において筆者は、第七章にてすでに指摘した中国の画廊に関わる諸問題を再び取り上げ、将来にわたる問題克服を探ることを通じて将来の発展の方向性について論を展開する。筆者の問題意識を支えるのはネット社会における情報戦略の重要性である。筆者は、これに関連して制作者と画廊との分業に関する問題をも取り上げ、制作者に対する芸術家としてあるべき教育の重要性をも指摘する。そこには、芸術管理がインターネットの出現と深く関わり、インターネットといういっそう広範な地平において、画廊をはじめとする社会の側から制作者への働きかけという双方向のプロセスを、芸術管理の視点から吟味する必要がある点などにも、今日の中国が直面する芸術管理上の問題があると筆者はいう。

第八章において、筆者は日本の画廊産業の未来について、展覧とオークションに即して論を展開する。筆者によれば、市場の大衆化、売買方法の多元化、人材の専門化、そして国際化に向かっている営みなどにおいて、今後とも日本の画廊には発展の可能性が大いにあるという。

第九章において、筆者は、以上のような考察を踏まえ、画廊を中心とする芸術管理のシステム、文化、資金、人員などにわたる中日両国の協調の可能性と必然性について議論する。そのなかで筆者は、国民性とりわけ慣習、文化政策、商業上の特色など相互に尊重されるべき項目をあげて協力関係の前途をかなり楽観的に展望する。

第十章は本論全体の結論である。筆者は、今日において長足の発展を遂げつつあり、巨大な市場を有する中国の画廊は、西欧諸国の水準に近づきつつあるとはいえ、贋作、知的所有権などに代表される法律的問題など、すでに成熟している日本の経験から学ぶべき点は多いという。さらには、大衆化、多文化、専門化、国際化などといった現代の趨勢のなかで、とりわけ芸術管理システム、ひいては資金、人員などハード面と文化的諸要素といったソフト面において、その全体的システムにかかる中日両国の協調と協働の必要性はますます不可欠になるであろう、と筆者は予測する。

## 審 査 の 要 旨

### 1 批評

本論文は、日中のいわゆる広義の意味での「画廊」の歴史と現状、そして未来について、芸術管理という視角に立脚しながら総合的、比較論的に考察したおそらくは最初の論攷であり、きわめて意欲的な著作である。日本語、中国語、英語にわたる膨大な資料を渉猟しながら、あわせて現地調査による知見をも交え、新たな学問領域を開拓しようとする真摯な姿勢と丹念な分析には好感がもてる。しかも、筆者の個人的な関心を超えて、中国の学界、わけでも廈門大学芸術学院からの期待に応えようと企図し、芸術管理という新領域のなかで従来はほとんど空白であった「画廊」研究に注目したことは、本論文の意義を決定的に高めるものであるといっても過言ではない。また、結論として筆者が掲げる日中協働という方向性ならびに現代の日中の画廊に関する分析とその問題点の克服というに論点についても、その議論の主旨はきわめてバランスのとれたものであり、実直かつ穏当なものであることから、おそらくは誰も異議を唱えるものではないであろう。

ただし、対象領域が膨大であるだけに避けられないこととは思われるが、やはり個々の事象研究についてはさらなる深い考察が求められる点があることも否めない。さらに欲をいえば、論述の展開と記述の正確さといった面においても克服すべき若干の問題点があることも否定できず、当然のことながら今後のさらなる研鑽が俟たれる。また、本論文において展開された「芸術管理」という視点が、この分野の研究史のなかでどういった位置を占めるのかという点についても、さらに詳しく論じるべきであったことはやや惜しまれる。とはいっても、本論文が、日本と中国の学界に対して確かな貢献を果たすであろう上記のような十分な内容を備えていることは疑いの余地がなく、そうした意味において、本論文はまぎれもないすぐれた論攷であると判断される。

### 2 最終試験

平成29年2月20日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(2)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(学術)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。